「祈りを紡ぐ」

日本聖公会「8・15 平和メッセージ」の最後にも紹介されていた以下の言葉を皆さんと分かち合いたいと思います。

『今年 6 月 23 日沖縄慰霊の日に読まれた平和の詩は、沖縄県立宮古高校 3 年生の仲間友佑さんの「これから」でした。

　この詩の作者の祖父母は、もう戦後生まれです。戦争を直接体験しなかった祖父母から、その子を通して孫である詩の作者にまで、平和を希求する祈りの重みが脈々として伝えられているところに、「平和の詩」の真価があることを学びとりたいと思います。

　以下は、詩の最後の一部です。

「人は過ちを繰り返すから　時は無情にも流れていくから　今日まで人々は　恒久の平和を祈り続け　小さな島で起きた　あまりに大きすぎる悲しみを　手を繋ぐように　受け継いできた　それでも世界はまだ繰り返している　七十九年の祈りでさえも　まだ足りないというのなら　それでも変わらないというのなら　**もっともっとこれからも僕らが祈りを繋ぎ続けよう**　限りない平和のために　僕ら自身のために　紡ぐ平和が　いつか世界のためになる　そう信じて」』

―引用はここまで―

「もっともっとこれからも僕らが祈りを繋ぎ続けよう」との呼びかけに私は心動かされました。主イエス様は「求めなさい。そうすれば、与えられる。探しなさい。そうすれば、見つかる。叩きなさい。そうすれば、開かれる。（マタイ 7:7~8）」と教えてくださっています。新約聖書原典のギリシャ語では「求め続けなさい」、「探し続けなさい」、「叩き続けなさい」とう継続命令として記されています。神の国の実現のためには何も変わらない現実の中であっても、継続していくことが大切なのです。先日 8 月 18 日（日）に「奉仕のススメ」研修会（東北教区奉仕職養成グループ主催、教役者聖職候補生後援会共催）が行われました。信徒と聖職の召命に聴くということで李司祭と有我聖職候補生のお二人からそれぞれ御自身の「召命」についてお話しを伺うことが出来ました。私はお二人のお話を通してそれぞれがどのようにして神さまと出会い、神さまからの招きに応えようとされたのかを知ることが出来て感動しました。李司祭は「私が一番聞かれる質問で一番答えるのに難しいのは、なぜ李司祭は聖職を志したのですかです」と仰っておられました。そして、その答えはまだご自身の中でも出ておらず、おそらくこれからずっと考えていくでしょう。そのためにも私も祈り続けていきます。皆さんも神さまから必要とされて招かれているのですから、神さまが自分に何を求めているのか祈り続けましょうと呼びかけてくださいました。

私は「紡ぐ」という言葉が好きです。「祈り続けていく」とは「祈りを紡ぐ」ことだと思います。正確には「紡ぎ続けていく」ことです。祈りは無力ではありません。祈り続ける事によって私たちの信仰を支え、イエス様の視点に立ち続けることが出来ます。真の平和のためにこれからも僕らが祈りを繋ぎ続けようと呼びかけた仲間さんの言葉に連帯したいと思います。

私たちはイエス様から「神の国」の完成のために招かれ続けているのです。その呼びかけに応えていくためにも祈り続けて参りましょう。（司祭　越山哲也）